
キン肉マン 時間超人編 タッグトーナメント

黒伽喲 一馬

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

キン肉マン 時間超人編 タッグトーナメント

【Nコード】

N2406C

【作者名】

黒伽喼 一馬

【あらすじ】

時間超人が辿ったもう一つの末路…

序文（前書き）

初代と2世の第一部は、先に読んでほしいですが、

なるべく、初代のみや2世のみの方にもわかるようにがんばります。

序文

今回は、初投稿ということで、二次創作にしてみました。

初代と2世の弟1部を知っていれば、大丈夫と思います。

時間超人が夢の超人タッグ編後ではなく、夢の超人タッグ編前に来ていたらというパラレルものです。

なので、矛盾点いっぱいと思いますが、まあ、キン肉マン自体がもともと…

まあ、序文はこれくらいにして、次回から、始めたいと思います。

第1話 ザ・坊ちゃんズ

悪魔の種子との闘いが終わり、万太郎たちにも平和な日々が戻ってきた…かに見えた。

一時的な平和を満喫していた万太郎たちの前に、突如、現れた得体の知れない二人組。

その二人組の名は、サンダーとライトニング。

「ジョワジョワ。」

「又ワ又ワ。」

妙な笑い声を挙げていた。

だが、そこに偶然居合わせたケビンマスクによって、その笑い声は途絶える。

超人の本能で危険でも察知したのであるうか、ケビンは、サンダーに向かって蹴りを放っていた。

そして…

「万太郎！」

あの闘いから日も浅かったことが功をそうしたのであるう。

その掛け声で、万太郎も飛びだしていき、見事、NIKU LA Pを成功させ、サンダーは倒れた。

「やはり、歴史を変えるしか手はないか。」

「何をするつもりか知らないが、その前に倒してやる。」

ケビンは、次の標的をライトニングと決め、その手を伸ばした。

「クッ…」

しかし、もう少しのところまで届かず、ライトニングは黒い渦の中

へと消えていった。

ライトニングは、自身の能力を使い、過去へと行った。

だが、焦っていたためか、そこは、ライトニングの行きたかった時代ではなかった。

「伝説超人の疲労しきったあの時代を狙おうと思っていたが…まあいい。歴史の流れをフルに利用させてもらおう。運よく、それほど手違いは無い。」

ライトニングはそう言い、地上へと降りた。

ライトニングの来たその時代では、もうすぐ、超人タッグトーナメントが開かれることとなる。

第2話 鬼哭愚連隊

ライトニングは、自身の能力を使い、過去へと行った。だが、焦っていたためか、そこは、ライトニングの行きたかった時代ではなかった。

ライトニングは、もうすぐ開かれるであろう超人タッグトーナメントを待っていた。

「サンダーのいない今、パートナーが必要か… 本当の歴史ならば、優勝はマッスル・ブラザーズことザ・マシンガンズ。準優勝は、ヘル・ミツシヨネルズ。ベスト4は、それに2000万パワーズとはぐれ悪魔超人コンビを加えた4組。… 同じ悪行超人とはいえ、この時代では、まだ悪魔超人や完璧超人と完全に分かれていた時代、ヘル・ミツシヨネルズやはぐれ悪魔超人コンビでさえ、正体不明の私とは組まないだろう。第一、パートナーがすでに存在している。まあ、パートナーは始末すればすむか。だが、狙うとすれば、コイツか…」

数日後、ライトニングは、中国にいた。

「死皇帝とザ・ガオンだな？」

「そうだが？」

「宇宙超人タッグトーナメントのことで話がある。」

「宇宙超人委員会のものか？」「悪行超人とはいえ、超人タッグの実力者として名高いため」として誘ってもらったのはありがたいが、その話は断ったはず。朕の目的は別にある。」

「そう、お前たちは、出場を辞退した。出場していれば、もう少し、

伝説を殺せたものを。」

「伝説？」

「お前の望みは、不老不死だろうか？」

「何故、それを？」

「お前の息子：屍魔王に聞いたことがあってな。そんな弱いパートナーでは、目的は達成されないまま終わるぞ。」

「何を……」

ガオンは、ライトニングに襲いかかったが、その瞬間、ライトニングのライトニングカッターが決まった。

「今回見つかった宇宙超人タッグトーナメントのトロフィー、あれこそが、お前の探す不老不死の妙薬だ。」

「何！……だが、何故、そんなことを朕に話す？」

「誰でもよかったのだ。目的さえ、一致した実力者ならばな。完全無比超人となれば、正義超人も残虐超人も悪魔超人も関係ないからな。お前は、私の技にも適した超人だ。」

第3話 ヘル・ミツシヨネルズ

「ほう…いいことを聞かせてもらった。」

「ネプチューンマン！何故、ここに！」

「ほう、私の名を知っているのか。なに、まだ日があるのでな。モンゴルマンの所在を知っていいそうな超人を探していたのだ。」

「モンゴルマンを？」

「うむ。敵としては、邪魔な存在ではあるが、ロビンマスク同様、完璧超人になりえるほどの力量を持つ者。」

「ロビンマスクは、私の正体を隠すためにも会うわけにはいかないが、モンゴルマンには会いたいと思っていたのだ。だが、いい情報をもたらった。お礼に…来い、武道。」

「クツ…ビッグ・ザ・武道、いやさ、ネップチューン・キングまでいたとは…」

「クロス・ボンバー…！」

ガオンも含め、そこには、3体の超人の死体が転がっていた。

こうして、少ししか変わらぬ歴史が開始された。

一方、現代では…

「何が目的であそこに現れた？」

「お前の仲間はどこへ消えた？」

「あいつの言った「歴史を変える」とはどういうことだ？」

サンダーへの尋問が続いていた。

「…ならば、話してやろう。「歴史を変える」とは、過去へ行きその過去へ行ったということ。」

「そんなことができるはずが…」

「現に、お前たちの前からライトニングは消えた。」

「…過去へ行って何をするつもりだった？」

「何だってできるさ。お前たちの親の代…現在に代表される多くの伝説が輝いたなどとされる時代…」

「それがどうした？」

「それが何故、伝説となつたとされるのかは、知つての通り、一番我々悪行超人との闘いが激しかったからだ。…「伝説」などと呼ばれているが、全ての試合に楽勝や大勝という言葉は当てはまらなかったはずだ。…そんなときに、微力でも悪行超人に新たな力が加えられたら、どうなる？」

「そんな記録はどこにも…」

「お前たちは、その変えられた過去の上にいるんだ。気付く方がおかしい。だが、時間超人であるオレには解る。活躍するはずだった伝説は消えた。一つの伝説は消え、伝承すべき技は途絶えた。」

「何？誰が消えたというのだ？」

「お前たちの知る最高の伝説、カメハメ。」

「カメハメは、悪魔超人によつて殺されたはずだ。」

「その悪魔超人に地獄のローラーを教えたのは、ライトニングだ。」
「！！！！」

「本来の歴史ならば、はぐれ悪魔超人コンビと対戦したニューマシンガンズは、苦戦こそするも勝利し、カメハメは、死なず、テリーを説得し、グレート座を譲り、セコンドとなるはずだった。そして、その後に関われた王位争奪戦では、マッスル・ドッキング以上の超人界の宝とも呼べる技を開発し、キン肉スグルを影ながら助けた。しかし、歴史は変わった。正義超人たちの力はガタ落ちだな。」
「オイ！俺たちも過去へ連れて行け。」

「オレでは無理だ。超人界の最高の頭脳、ミートにでも頼むんだな。」

第4話 悪衆・時間超人

ミートの力により、万太郎たちは、過去へ行くことができた。

だが、何を目論んでか、そこには、三人の密航者がいた。

正式な乗組員は、万太郎・キッド・ジエイド・ケビン・マルス（スカーフェイス）・チェック・ハンゾウ・ボーンコールドだけであった。

密航者の一人は、あのサンダーであった。

正義超人を騙すことに成功した彼は、密航し、過去へと来ていた。

サンダーは、ライトニングを探しだし、ことのしだいを話した。

「そうか。私は、一度、死んだか…まあ、今回は、お前もいるうまいくことだろう。まずは、大会委員長に挨拶に行こうか。」

大会本部…

そこには、ハラボテだけでなく、真弓やスグルなどの姿もあった。

「委員長はいるか？」

「大会委員長のハラボテ・マッスルだが？」

「キン肉真弓やキン肉スグルまでいるのか？こいつはいい。委員長、私たちを超人タッグトーナメントに出してもらおう。」

「何を？」

「お前たちにとっても悪い話ではない。超人が増えれば試合回数も多くなる。当然、客も多くなる。それに、どうせ、勝つのは、キン肉スグル、お前だ。お前なら、どんな超人と組んでも優勝できる。」

「いやー、わかってるじゃないか。委員長、出してやりましょう。」
「待ってください。王子、いくら誰にも相手にされなくなり、パートナーがいなくなったからって、そんな見ず知らずの超人の言葉に乗っては…」

「何じゃ、あんな奴ら。こっちから手を切ってやったんじゃ。それにまだ、手は打ってある。」

「何じゃ、キン肉マン、出場するのか？もう席はあまりないぞ。」

「それならば、我々の参加も認め、参加チームを12組までと増やしてはいかがですか？宇宙最強のタッグを決める大会、それくらいでないといけないでしょうし、大会側があえて空席でも設けていれば、その空席を狙うつわものも現れるというものでしょう。まあ、優勝がわかってるのが、悲しいですが。」

「いいぞ。いいぞ。」

「言つたれ。言つたれ。」

「…全く、この親子は…」

「しかし…」

「委員長、あなたは、最強のタッグを求めるあまりに、死皇帝などにも声をかけたのでしょうか？」

「何？本当か？」

「一瞬の気の迷いじゃ。それに、やつらは辞退しておる。だが…お前らの言い分もわかった。考えておこつ。」

キン肉マン 時間超人編 タッグトーナメント

第5話 新世紀悪魔超人（前書き）

やっと、オリジナルタッグ登場です。

第5話 新世紀悪魔超人

その頃、20世紀についた万太郎たちは、ライトニングの行方を探していた。

そんなとき、一人の密航者が、チェックのもとへ現れる。

「何故、お前がここに？」

そこにいたのは、ボルトマンであった。

「これの力だ。」

ボルトマンはそう言って、自身に埋まるジェネラル・ストーンを見せた。

「それは……」

「そう。恐怖の将の再生の力だ。あの方は、新世代超人たちのこの計画を知るやいなや、ジェネラル・ストーンを二つ創られた。」

「二つ？」

「そう、二つだ。急いでも、それが限界だった……一つは、オレの分。そして、もう一つは、お前の分だ。」

そう言って、ボルトマンは、チェックの体へジェネラル・ストーンを押し込んだ。

「う……」

「さあ、再生させる。お前の悪の心を。」

「う……う……」

チェックの頭には、サンシャインからの教えやあの日あった悪の心が何度も何度も再生されていた。

「おさまったか？」

「ええ。我に返った気分ですよ。どうします？我々の伝説でも超えておきますか？」

「いや、必要であれば、そうするが、できれば、悪魔超人は残したい。それに、いくら、お前でも、師の相手ができるのか？」

「師？まだ、師ではないでしょう？しかし、確かに、今、殺せば、歴史がどう変わるかわからない。そうなれば、私の技術だって…まあ、彼なら、同じような道を歩みそうですが。」

「ああ、そうだな。」

「歴史の動きが見えない今、少し、機会を待ちましょう。」

第6話 ノーリスペクト

ライトニングを探しただけで数日が過ぎていった…

ライトニングの搜索を続ける一同。

「あー!!」

その声をあげたのは、その搜索をサボり、落ちていた新聞を読んでいた万太郎であった。

「どうした？」

「見てよこれ。」

「何？」「宇宙超人タグトーナメント 8組の予定から12組に変更!!」なんだこれは？オレたちの知る歴史と違うぞ。」

「また、新しい時間超人か？」

「いや、これは、我々の誰かと考えるべきだろう。」

「そういえば、チエツクがいない。」

「まさか、チエツクが…」

「みんな、そんなことより、ボクが驚いたのは、こっちだよ。」

そう言つて、万太郎は、一つの記事を指差した。

「…」「現在決定している参加チームは、超人師弟コンビ・モーストデンジャラスコンビ・技巧コンビ・四次元殺法コンビ・悪衆時間超人の5組」…何？サンダーまでこっちに来ていたのか？万太郎、俺たちも出るぞ。」

「新世代マシンガンズか…よし、ノーリスペクトで俺たちも組むぞ。」

「そうになると、俺たちは、Bーエポリキューションズか。」

こうして、ノーリスペクト（ハンゾウ&ボーンコールド）・Bーエポリキューションズ（スカー&ケビン）・新世代マシンガンズ（万

太郎&キッド)の出場が決まった。

その頃、キン肉スグルは、モンゴルマンに誘いを断られ、プリンスカメハメとマッスルブラザーズを結成させていた。

「動きが出てきましたか。我ら、新世紀悪魔超人も動き出すとしましよう。」

第7話 技巧コンビ

トーナメント初日：

「このタッグトーナメント、その見所としましては、委員長の演出なのか、キン肉マンたちの息子を名乗る謎の超人たちが出場していることでしょう。そんな今回の出場タッグは、Aブロックは、B・レボリューションとノーリスペクトをシードとし、技巧コンビ対新世代マシンガンズ・超人師弟コンビ対モーストデンジャラスコンビとなっておりません。続くBブロックは、2000万パワーズ対ニユーマシンガンズ・四次元殺法コンビ対マッスルブラザーズの対戦があり、その勝者がそれぞれシードである悪衆時間超人とヘルミツシヨネルズ闘う予定となっております。解説は私！」

「ちよつと待った！我々はぐれ悪魔超人も参加させてもらおう。」
開会の挨拶も終わらぬうち、大会に参加してないはずのアシユラマンとサンシャインが会場に乗り出した。

「出たな！悪魔超人！悪魔將軍の残骸が欠けていたから来るのはわかっていたぞ！」

悪魔超人たちは、正義超人たちに撃退されるかと思われた。
しかし、思わぬ方向に話は進む。

なんと、正義超人たちは、観客の声により悪魔超人の出場を認め、空席が無かったために、技巧コンビがはぐれ悪魔超人に倒され、その席ははぐれ悪魔超人のものとなった。

そして、この出場により、この大会は、正悪問わず乱入ありとされたこととなる。

これにより、Aブロックの試合、技巧コンビ対新世代マシンガンズは、はぐれ悪魔超人对新世代マシンガンズへと変更となった。

第8話 はぐれ悪魔超人コンビ(前書き)

もう少しはぐれ悪魔超人との闘いは、書きたかったのですが、小説だと、漫画以上に長くなるので、はぐきました。

第8話 はぐれ悪魔超人コンビ

はぐれ悪魔超人对新世代マシンガンズ…

技巧コンビに代わり、はぐれ悪魔超人が入ったことにより、このような対戦となった。

闘いは、長時間に渡り行われたが、万太郎には勝利が見えていた。

万太郎にとってアシユラマンとの闘いは2度目のことであり、また、サンシャインの弟子であったチェックメイトとも闘ったことがあったため、そのクセを確認することができていた。

そして、何より、キッドとの友情の連携は、完璧であった。それは、敵であるアシユラマンやサンシャインにも感じられていた。

「改良版阿修羅バスター！」

「何の、火事場のクソ力！！」

アシユラマンのかけていた阿修羅バスターは、反転し、万太郎がキン肉バスターをかける形となった。

「ぐあー！」

「うおー！マッスルG！！」

「…アシユラマン！」

万太郎のマッスルGは、成功しなかった。サンシャインが割り込みそれを止めた。

「…悪魔にだって…悪魔にだって、友情はあるんだ。…降参しよう、アシユラマン。」

激闘の末、はぐれ悪魔超人は、降参した。

「…待ってくれ！サンシャイン…アシユラマン…」

去ろうとしているはぐれ悪魔超人を万太郎が呼び止めた。

「…何だ？」

「もし、悪魔に友情があるのなら…正義超人になってほしい。そして、子どもや弟子が間違っただ道に行こうとしないように、道を示す模範になってほしい。」

「正義超人の勢力拡大か？…だが、確かに、悪魔将軍も敗れたのだ。今さら、悪魔にこだわる必要もないか。」

そう言い、アシユラマンとサンシャインは去っていった。

「敵を諭すなんて…成長したな、万太郎。」

「いや、ただ、あんな悲劇を聞いた後の再戦だったから…」

第9話 モーストデンジャラスコンビ

モーストデンジャラスコンビ対超人師弟コンビ…

しかし、その試合に乱入しようとする者たちがいた。

「わざわざ、新世代超人と伝説超人の両方を相手にすることはありません。伝説を消せば、おそらくは、新世代超人は消えます。それがなかったとしても、動揺はあるはずです。」

「待て！誰だか知らないが、ダディの試合の邪魔はするな！」

「おや？シード権を持つB・レボリューションのお二人ですか。」

「お前は…チエックメイト！…それにボルトマン！」

「新世紀悪魔超人と呼んでもらいますよ。」

「何じゃ？コラ！何をしとるんじゃ、お前たち！」

「委員長、我等もこの大会に参加させていただきたいのですが？」

「チエック…お前、悪魔に魂を売ったのか？」

「何をいまさら、私は、元から悪魔超人ですよ。」

「クソ…ケビン！時間超人以外に未来を知る敵がいるのは面倒だ。今のうちに倒しておくぞ！」

「双方の合意があるなら、良しとしよう。」

「…は盗ってきましたか？」

「ああ、盗ってきたぞ。だが、こんなものを何に使う？」

「ボルトマン、あなたは、タッグを組んでいたのに、そんなことも知らないのですか？悪魔超人には…いや、魔界には…いろいろと秘密があるのですよ。」

「いろいろと思いついてきたようだな？」

「ええ。私には、サンシャインという師がいましたから。記憶が蘇れば、知識は私の上ですよ。…とはいえ、今さら、魔界のことなど

知る必要はありませんよ。魔界のプリンスは負けたのですから。」

第10話 B・エボリューションズ

B・エボリューションズ対新世紀悪魔超人…

「はあー！！！！これで終わりです。」

チエックは、ケビンに対して馬式誉れ落としを放った。

「こんな技くらいで敗れると思うか？」

「下を見たらいかがですか？」

その下には、魔の四角窓を開けたボルトマンがいた。

「これぞ。新悪魔のコンビネーションパート1！！！」

「ケビン！」

スカーフェイスが割って入り、その攻撃は阻止された。

「あなたたちは、一度敗れたこのボルトマンに対して、恐怖心が無いのかと思ってましたよ。再戦しようというのですから。」

「…一度闘った敵なら、敗れた相手でも攻略法は考えてあるさ。それから…OLAP！…ボルトマン、お前は、背後からの攻撃に弱い。」

「…超人発電所と呼ばれた半永久的なこのパワーを使えば、こんな技、耐えきれぬ。」

「お前、何の技で自分が倒されたのか、わかってないのか？」

「まさか…」

「そのまさかだ。」

それを掛け声にしたかのように、スカーフェイスが飛び出し、ボルトマンに、アルティメット・スカーバスターを掛けた。

「…まさに、掟破りのアルティメット・NIKU LAP！！！！」

スカーフェイスとケビンマスクの技により、ボルトマンは倒れた。
「ぐああ…このオレのパワーを超えている…」

その頃、本戦では…

「今だ！タッグホームションA！！！」

ロビンの掛け声で、ウォーズマンは、タワーブリッジを極められ、その反動を利用し、ウルフマンの肩を貫いた。

「負けを認めよう。」

これにより、ロビンとウォーズマンの超人師弟コンビは勝利をおさめ、シードのノーリスペクトとの試合が決定した。

第11話 悪魔の種子

キン肉マン 時間超人編 タグトーナメント

「ボルトマン、そこで休んでいなさい。」

「チエツク、一人で闘うつもりか？降参したらどうだ？」

「降参はしませんよ。」

「一人で闘う」というのは、少し違いますが…ボルトマン、そこで見ているといいですよ。」

チエツクは、そう言うと、リングインした。

「本当に、一人で闘うつもりか？」

「それより、自分の心配をするべきですよ。これが、何かわかりますか？」

「…アシユラマンの装飾品か？それがどうした？」

「魔界の王家ゆえでしょうかね。とある魔界のゲームのコントローラーとなったりと王家が有利に試合を進めることのできる仕掛けがいろいろとあるようです。…その中でも、この悪魔のキャンバスなどは、絶対的なもの。これに、ボルトマンが恐怖の将より持たされた悪魔の種子たちの血をかけると…」

チエツクがそれを敷くと、それはみるみる4人の悪魔の種子へと変わった。

「伝説を出さずとも、あなたたちは倒せるでしょう。この4人と私とで十分です。」

「何を…」

「メルトダウンとタトウマン、スカーフェイスを押し返しててください！ゲッパ일랜드、ローリング・ウォーター！」

スカーフェイスは、ローリング・ウォーターが当たり、その場に倒れた。

「マルス！…クソ！」

「怒りにまかせるなんてらしくないですよ、ケビンマスク。それとも、ロビン戦法は、あなたには無理ですか？コンステレーション、

ケンタウルス座の用意を。…これで終わりです。ダブル馬式誉れ落とし—!!」

コンステレーションとチェックの馬式誉れ落としがケビンに極まった。

「ぐ…」

「ほう、まだ立ち上がりですか？父親と師の試合を見て、自分も勝てるとも思いましたか？師や父親の強さ。自分の強さではありませんよ。それでも、立つなら、殺しますが。」

「やめる—!」

「おや？新世代マシンガンズの二人ですか？」

「もう、試合は終わっている。まだ、「闘いたい」と言うのなら、次の試合のボクが相手だ。」

「…やめておきましょう。ただ、次の試合、これ以上の惨劇をお見せしましょう。」

第12話 赤いヘルミツシヨネルズ

Aブロックの第1試合は、全て終わったはずであった。

「それでは、Aブロックの試合が終わりましたので、続いて、ニユーマシンガンズ対2000万パワーズの試合に移りたいと…」

「ちよつと待った!」

「ん? あれは、誰でありましょうか? ヘルミツシヨネルズでしょうか? いや、ヘルミツシヨネルズを被う布と違い赤い布で被われています。」

「我等も参加させていただこう。第1戦は、ノーリスペクトを指名したい。」

「こちらとしてはかまわないぞ。」

「…そうか、ならば、早速始めよう。」

「お前たちのその布、この腕刀で斬り裂いてやろう。」

「…無理だろうな。そう言えば、昔のお前は、いい趣味を持っているな。…その趣味、私が継いでやろう。」

「そう言うそれは、指を3本立てて見せた。」

「ん? 30分で倒す」とかの宣言か?」

「いや、惜しいがな…30秒だ。」

「何を!」

ボーンとハンゾウは、それに飛び掛かった。

「…くだらぬ闘いだ。おい! あれをやるぞ!」

それは、ボーンとハンゾウの首を掴み、その場に落とすと、パートナーに呼びかけた。

その呼びかけに応じるかのように、そのパートナーの体に変化した。それは布越しでもわかり、パートナーは、その巨大な腕を出し

た。

「クロスボンバー!!!」

その技により、ノーリスペクトの二人は、倒れた。

「ぐあ…」

「安心しろ、今は、無駄な力は使いたくない。覆面と顔面を狩るのは、優勝の後だ。」

その二人は、去っていった。

ノーリスペクトには、敗北感だけが残っていた。

第13話 乱入コンビ

Aブロックから変わって、Bブロックの第1試合が行われた。

ニューマシンガンズ対2000万パワーズ…

その試合の最中、委員長の前に、妙な二人組が現れる。

「この大会は、乱入を認めているらしいな。我等も乱入させてもらおう。」

「残るシードの誰かがいいとすりなら、認めるが…」

「我々は、やめておこう。我々とは、向こうがやる気を無くしてしまうからな。それより、武道、さっきのやつらを調べに行くぞ。」

「ヘルミツシヨネルズはダメだそうだ…」

「我等がやろう。」

「ほう…悪衆時間超人か、相手にとって不足はないな。」

「こちらとしては大アリだがな。」

「何を！」

「おい、双方合意ということでもいいのだな？では、そのリングで始めてくれ。」

一方、ニューマシンガンズ対2000万パワーズの試合では…

「テキサスクローバーホールド!!!」

アパッチのおたげびで怯んだバッファローマンに対して、テリーのテキサスクローバーホールドが決まっていた。

「グアー!!!クソ、こんなもの！」

痛みをこらえながら、強引にそれを解いていく。

「さすがは、1000万パワーの超人だ。力技でこれはずすとはな。だが、まだ足に痛みは残るはず…」

「クツ…確かに、交代してくれ、モンゴルマン。」

「ああ、私もテリーマンとはしっかりと闘ってみたいと思っていた。」

「モンゴルマンか、オレも闘ってみたいと思っていたところだ。」

第14話 ニューマシンガンズ

モンゴルマンの水平チョップにテリーマンのパンチと、チームリーダー同士の激しい攻防が続いていた。

「…テキサストルネードエルボー!!」

テリーの技は、モンゴルマンに当たり、モンゴルマンは、宙を舞った。

「何の…レッグラリアート!」

モンゴルマンは、自身の弁髪を使い、空中で姿勢を取り戻し、テリーへ攻撃を仕掛けた。

「はあはあ…」

「ニューマシンガンズの弱点だが、まだジェロニモが育ってないため、自身の判断で行動できないことと。そして、そのために、テリーマン…お前が出すのをためらっていることにあるのではないかな?」

そう言っつて、モンゴルマンは、テリーに手を差し出した。

「うるさい!オレは、あの男に…キン肉マンに勝たなければならぬんだ。」

テリーマンは、隠し持っていたメリケンサックを左手にはめ、モンゴルマンに殴りかかろうとした。

しかし、モンゴルマンは、それに気付いていたのか、テリーマンの背後に回り、その左手を抑えていた。

「かつて、お前との試合を反則という形で終わらせたのは、この私だ。だからこそ、この闘いを汚したくはない。お前との闘いも、誇りたいんだ。」

モンゴルマンが小声でそう言っつと、テリーは、負けを認めた。

その頃、悪衆時間超人対乱入コンビの試合では…

「サンダー、悪いが、一人でやらせてもらうぞ。」

「いいが、どうした？」

「お前の調べによると、私はヘルミッシヨネルズに敗れたそうじゃないか。」

「なるほど、その部類の超人の手腕が見たいか。」

第15話 四次元殺法コンビ

四次元殺法コンビ対マッスルブラザーズ…

カメハメ扮するキン肉マンガレートの前でいいところを見せようとし、力んでしまったキン肉マンが苦戦していた。

一方、乱入コンビ対悪衆時間超人の闘いは…

「お前たち、完璧超人だろ？」

「何故、それを？完璧超人のことは、まだ、世に知られてないはず。」

「ああ、まだ、知られてないし、これからもそれほど知られることもない。」

「何！」

「まあ、聞け！完璧超人の初戦は、お前たちのせいで敗戦。お前たちは、首領に裁きを加えられることとなる。」

「それは、予言か？」

「いや、私が昔学んだ過去だ。」

…「過去」だと？

「まあ、深く考えるな。」

「だが、何故、そんなことを教える？」

「勝敗が見えないか？敗戦は、制裁だろ？今すぐここから逃げるがいい。」

「何が望みだ？」

「察しがいいな。あの赤いヘルミツシヨネルズだ。正体不明では、さすがに、手が打てないのでな。さあ、逃げた法がいいぞ。首領格

相手で、その制裁を逃れられると思うか？」
「ああ……」

残虐超人・完璧超人・悪魔超人・時間超人の集まってしまったその大会を知識の神が覗いていた。

「神に近いとされる完璧超人……その中でも最も力のあるとされるネプチューンキング。我が邪悪五大神の敵とも呼べる正義超人……その中でも急激な成長を見せ神をも超えるとしているキン肉スグル。この二人を観察するために、来たのだが……時間超人か……面白い存在が現れてくれたものだ。」

天上界で知識の神の笑い声がこだまする。

第16話 殺人遊戯コンビ

四次元殺法コンビ対マッスルブラザーズの試合の終焉…それは、超人界の歴史に残るあの技が世間に披露される瞬間であった。

「マッスル・ドッキングー!!」

キン肉バスターとキン肉ドライバーを併せた超人タッグの伝説の技。

その技の前に誰もが息をのんだ。

その頃、乱入コンビは、あの赤いヘルミツシヨネルズの前にいた。「おいおい、せつかく、あの闘いを見て過去を振り返りたかったのに、こんなところに呼び出して何のマネだ?」

「うるさい。お前たちを倒してその正体をあばいてやる。」

勝負はすぐに終わり、乱入コンビの二人は、無惨な姿で殺された。

「…まあ、これでも過去は振り返れたか。」

そのとき、それに対して、拍手をする男がいた。

「…いやー、見事なものですな。さすがは、伝説超人ネプチューンマンだ。」

「き、貴様は、チエックメイト!…何故、判った?」

「その技やその言動から。そして、何より私は正式な乗組員でしたから、どれくらい重量がオーバーだったかもわかっていたので、そこからポルトマンとサンダーの重量を差し引いたところ、出てきたのは、未来のあなたの重量でしたので。もちろん、重量だけでは他にも候補はいましたが、パートナーにその超人を選んだことで、あなたがこの時代に来てもう一度完璧超人の道を歩もうとしていることがわかったんですよ。」

一方、時間超人たちは…

「おい！まだ、日はある2000万パワーズとやらせてくれ！」
「連戦になるお前たちが構わないならば……」

第17話 d M p

「貴様の言う通りだ。俺の正体は、未来から来たネプチューンマンだ。かつて、俺は、時間超人ライトニングとその近くにいた残虐超人を殺した。そのとき、俺は、ある話を耳にしていた。都合のいいことに、キングはオーバーボディのせいで聞きとれなかったようだ。それにより、俺の大会の目的は、完璧から完全無比へと変化していた。大会の結果やその後の人生はお前の知るところだろう。正義超人になってからは、それを忘れかけていた。しかし、五大神の力を持ったフェニックスを天上界から見たとき、俺は、それを思い出した。初めは、正義超人という立場からそれを目指すつもりだったが、完璧を求めるとやはり行き着く先は、完璧超人だった。キングには見限りを付けた今、俺の目指すのは、真の完璧。真完璧超人を立ち上げる。」

「なるほど…」

「弱者などは死んで当然。覆面狩りでは生温い。全ての面においてそれを完璧にこなす者たちだ。」

「なるほど…サンダーの目的は、ライトニングの救出とそのもう一つの目的でしょうし、ボルトマンの目的は、話してもらってましたが、どうしてもあなたの目的が解らなかったので。真完璧超人、いい考えですね。」

「悪魔に賛同されるのもどうかと思うが。」

「ところで、手を組みませんか？」

「手を組むだと？」

「ええ。我々の目的は、この大会の優勝ではないので。」

「何をしてくれる？」

「あの新世代マシガンズを潰しましょう。」

「確かに、邪魔な存在ではあるし、お前たちがそれだけ本気でやってくれれば、新世代マシガンズにも傷は残るだろう。それで、お

「前たちは何を望む？」

「この時代のザ・マシンガンズの抹殺。そして、よろしければ、悪魔超人軍復興の手伝いを。」

「面白い。いいだろう。」

第18話 2000万パワーズ

2000万パワーズ対悪衆時間超人…

正義超人の中でも強豪の二人のタッグということもあり、時間超人も苦戦していた。

「ハリケーンミキサー！」

バッファローマンのその攻撃に、ライティングは何度も宙を舞った。

「ヌワヌワヌワ…さすがは、伝説超人。まさに伝説の力というわけだな。」

「まだ立てるのか？」

「ああ、こんな昔の技ではな。だが、私よりサンダーの方が効率的か。サンダー、交代だ。さっき出れなかった分暴れてこい。」

交代したサンダーは、一発の突きのみでバッファローマンを気絶させた。

「面白くないな…」

「大丈夫か。バッファローマン！バッファローマン！くっ…気絶している。あのバッファローマンを一発とは…恐ろしいパワーだ。バッファローマン、力を借りるぞ…ロングホーントレイン！」

モンゴルマンは、バッファローマンを持ち上げ、そのまま突進した。

サンダーには、ロングホーンが刺さったが、サンダーは笑っていた。

「ヌワヌワ…その技…歴史を変える難しさというものを痛感させる。」

「オ…オーバーボディだと!？」

「念には念をとっつだ。」

サンダーによつてそれは止められ、サンダーは、モンゴルマンすらもダウンさせた。

「伝説なんて、脆いものだな。」

「ついでに、モンゴルマンのマスクでも剥いでおくか。」

「そうだな。だが、サンダー、どうせなら、首を落としてしまった方が面白い。」

その頃…

「賛同していただき光栄です。」

「まあ、コイツの正体を解つたお前たちだ。前のはぐれ悪魔超人コンビとよりはマシな同盟になるだろう。」

「そういえば、サンシャインとネプチューンキングによるdMpもすぐに消えてしまいましたからね。」

第19話 マッスルブラザーズ

刃物へと変化したライトニングの足がモンゴルマンへと向かって
いたそのとき…

「待て！悪行超人！」

新世代マシンガンズが割って入った。

ライトニングは、キッドの蹴りにより、リングの外へと飛ばされ
た。

「クソッ！…邪魔が入ったか。退くぞ、サンダー。」

サンダーとライトニングは、去っていった。

その闘いを眺める一人の男…

「キン肉万太郎…テリー・ザ・キッド…」

「何か感じるものがあるのだろうか？」

「あ、あなたは、ハワイの巨星…プリンス・カメハメ！」

「そうだ…もう一度、キン肉マンと組みたいと思わないか？」

「しかし、キン肉マンには、すでにグレートというパートナーが…」

「なら、君がグレートになればいい。」

そう言っつて、カメハメは、グレートマスクを差し出した。

「それでは、あなたが、キン肉マングレート!？」

「テリーマン、やってくれるな？」

「しかし、キン肉マンが認めてくれるかどうか…」

「キン肉マンが認めてくれればいいのだな？」

「はい…他のやつと組んで解りましたが、オレには、やはり、キン
肉マンとのタッグ以外考えられない。」

「…だそうだが、どうだ？」

カメハメの言葉を合図に、隠れていたキン肉スグルが姿を現した。

キン肉スグルは、涙で顔を濡らしながら、テリーマンの手を固く握りしめた。

「今日の試合は、もう終わりだろう。テリーマン、君には、今から私とキン肉マンとで特訓を行い、キン肉バスターとキン肉ドライバ―を修得してもらおう。筋力の問題はあるだろうが、君は誰よりもキン肉マンとともに闘った男だ。技のタイミングなどはもうわかっているはずだ。」

第20話 悪魔六騎士

宇宙超人タッグトーナメント2日目…

「いいだろう。あとは、本戦でタイミングを合わせていけばいい。」

マッスルブラザーズ対ヘルミツシヨネルズ…

「グッ！なんだ？グレートのやつ、人が変わったかのように、スタミナに溢れている。」

「お前たちの語る完璧超人なども今日でお終いだ。」

「クッ…マグネットパワー・プラス！」

「させるか！」

すかさず、キン肉スグルが割って入り、吸われるような勢いでそれに蹴りを入れた。

その覆面は取れ、ネプチューンマンの姿があらわになった。

「この私が逆に覆面を剥がされるとはな…私は、かつて、正義超人だった。しかし…」

自信を喪失したのか、それとも、マッスルブラザーズの実力を認めてか、ネプチューンマンは、自分の過去を語り始めた。

その頃、新世紀悪魔超人と戦う新世代マシンガンズは…

「フッフッフ、あなたがたには、親の代からの因縁に敬意を評し、六騎士をお出ししましょう。」

出てきたのは、プラネットマン・スニゲーター・ジャンクマン・ニンジャの4人の悪魔六騎士…

万太郎たちは、六騎士から伸びるその手から何とか逃げていた。

「ザ・ニンジャヤスニゲーターまでいるなんて…」

「やはり、この人数でも難しいですか。まあ、マシンガンズは、悪魔超人の最も苦手とする二人ですから仕方ありません。我がナイトメアズとの因縁も含め、全て出した方がいいでしょう。ボルトマン、アレの用意を。」

チェックは、全ての持ち駒を出し、悪魔超人の壁を作った。

「こんな壁を作って何のつもりだ？」

「ボルトマンと4人の悪魔六騎士で、戦闘頭脳の無いアレを作るのですよ。おそらくは、あなたの脳裏に永遠に焼きつくであろう恐怖を…」

「万太郎、何かはわからないがやばそうだ。はやいところ、片付けるぞ。」

第21話 7人の悪魔超人

「…そして、私は、ネプチューンキングの跡を継ぎ、完璧超人を結成したわけだ。」

「なら、首領であるお前を倒せば、いいわけだな。」

「…待て、キン肉マン！」

呼び止めたのは、セコンドに付いていたカメハメであった。

「カメハメ師匠！何故、止めるのですか？」

「完璧超人の首領は、おそらく、ネプチューンマンではなく、ビッグ・ザ・武道だろう。…その力は、ネプチューンマンを超えている。その正体は、ネプチューンマンが言っていたネプチューンキングと見ていいだろう。」

「解りましたでは…たあ…キン肉バスター！」

キン肉スグルは、武道をかかえ、キン肉バスターを仕掛けた。

「今だ、グレート！」

「はい。キン肉ドライバー！…マッスル・ドッキング！」

「なんの…マグネットパワー！」

マグネットパワーにより、反発しあい、マッスル・ドッキングを不可能とした。

「あせるな！新キン肉バスターとキン肉ドライバーで行け！」

カメハメのその声により、冷静さを取り戻した二人は、新キン肉バスターとキン肉ドライバーを成功させた。

武道の覆面が剥がれ、その下からキングの顔が現れた。

「まだまだ…この私こそが完璧なのだ。この私が、負けることなどありえん！」

キングは、そう言いながら、テリーへと向かっていった。

だが、キングは、ネプチューンマンにパンチを入れられ、倒れてしまった。

「この世で完璧なものなどありはしない。あるとすれば、正義超人

の友情だけだろう…」

その頃…

「クツ…ダメだ。倒せない…霊なんて倒せないよ。」

「…そう言えば、パパに聞いたことがある。」

「悪魔超人の霊には、清めの塩が効く」と…」

「そうか…なら…」

新世代マシンガンズの快進撃が始まった。

「ターンオーバー・キン肉バスター！」

「カーフ・ブランディング！」

「マッスル・ミレニアム！」

「テキサス・コンドルキック！」

「マッスル・ドッキング！」

次々と悪魔超人たちは倒されていった。

「クツ…もう少しでボルトマンと悪魔六騎士で戦闘頭脳の無い將軍を復活させられたところを…あ、いいでしょう。融合途中とはいえ、將軍のデータは、だいたい解りました。」

「何をブツブツ言ってるんだ！？もう、残すは、お前とボルトマンだけだぞ。」

「降参しますよ。これ以上は、私の利益にならない。」

「お、おい？」

「ボルトマン、私の考えに疑問があるのですか？」

「い…いや…」

チエックは、リングを去っていった。

試合を終えたチエックたちの前に、あの赤いヘルミッシヨネルズが現れる。

「ご不満でも？」

「ああ…ボルトマンはともかく、お前は全力ではなかったな？」

「交渉決裂で殺しますか？ですが、そうになると、そちらもただではすみませんし、あなたを殺すのなら対消滅という方法でもいいのですよね？」

「クッ…制裁はやめておいてやる。」

第22話 超人師弟コンビ

赤いヘルミツシヨネルズ対超人師弟コンビ…

「オレがやるう。ロビンとは、もう一度闘いたかった。」

そう言ったのは、未来のネプチューンマンであった。

「お前が未来から来たというのは、本当か？」

「ああ。ロビン、だから、時間こそ経ってはいるが、オレは、お前の闘いたかったネプチューンマン、いやさ、喧嘩男だ。…さあ、放て、ロビンスペシャルを！」

「…まだどこにも出してない技まで知っているとは…どうやら、本当らしいな。」

ロビンは、ネプチューンマンをかつぎ上げた。

「どうした？このまま、回転して投げるんじゃないのか？」

「悪いが、知られている技をわざわざ出すほどお人好しじゃないんだ。…タワーブリッジ！」

「クソッ！…一度敗った技と油断していた。」

「ウォーズマン、スクリユードライバーだ！」

「クッ…オイ！あの戦術でやれ！」

その声とともに、それぞれのタッグパートナーが飛び出した。

「スクリユードライバー！」「スクリユードライバー！」

スクリユードライバー同士がぶつかり合い、パートナーは、ともにリングに倒れた。

倒れたパートナーは、二人ともウォーズマンであった。

「馬鹿な…」

「…フックが甘くなってるぞ！…喧嘩スペシャル！」

ネプチューンマンは、技を解き、逆に技をかけた。

「彼は、未来のウォーズマンなのか？」

「違う。やつの名は、オメガマン！悪魔超人では、ミスター・ステ

カセヤスニゲーターなど変身超人は珍しくないが、完璧超人には珍しいタイプの超人だ。」

「変身しただけだったのか…」

「おっと、この技からは逃げられない。」

「私は、やつを育て直したのだ。そう…完璧にな。オメガマン、ウォーズマンの攻略法は教えたな。長時間闘わずともお前なら勝てるはずだ。」

ネプチューンマンの声とともに、オメガマンの姿が変わる…

「…ハリケーンミキサー！」

「うっ…」

「そうだ。ウォーズマンは、一度、バッファローマンに敗れている。同じ敗戦でも、命まで奪われた相手…ウォーズマンにとって、キン肉マンより嫌な相手だ。そして、もう一人…」

オメガマンは、何度かハリケーンミキサーをくらわせると、再びを変え、宙を舞うウォーズマンを追った。

「…ロビンスペシャル！」

「…師であるお前には敵わない。いや、苦手意識があるというべきかな…」

ウォーズマンは、マットに沈んだ。

「ウォーズマン…私は、かつてのお前に、パロ・スペシャル…そして、OLAPの原型を見た。…あのとき希望を無くした私を救ったのは、お前だった。その後も、何度もお前は私の支えとなってくれた。」

「クッ…何度見てもその怒りのパワーというものは、恐ろしい。…だが、冷静さに欠けているな。」

ネプチューンマンは、ロビンを放し、腕を構えた。

それとともに、オメガマンも姿を変化させる…

「ネ…ネプチューンキング！」

「クロスボンバー！」

「グア…」

「それにより、ロビンもまたリングに沈んだ。
あとあと狩るための予行練習もできた。」

第23話 ザ・フェニックス

赤いヘルミツシヨネルズ対新世代マシンガンズ…

「オメガマン、万太郎の場合、火事場のクソ力の無いお前が万太郎に変身しても勝てないし、キン肉スグルの力を最近知るようにはなつたようだがそれに対しては善戦しているため苦手意識は無いだろう。お前の知っている者で変身するなら、ケビンかアシユラマンがベストなのだが、さすがにケビンの技やクセは知らないだろう。」

「では、アシユラマンで…」

オメガマンは、アシユラマンへと変身した。

「大丈夫か万太郎。」

「う…うん。アシユラマンは怖いけど…一応、二回とも勝ってるし…」

その言葉通り、万太郎は、善戦した。

「戦闘頭脳無しじゃあ、さすがにあの超人は無理として…オメガマン、戦法を変え、ヘルミツシヨネルズで行くぞ。」

「ハッ！」

オメガマンは、ネプチューンキングへと姿を変えた。

「クロスボンバー！」

「万太郎！」

その声を合図に、万太郎は、キッドとともにネプチューンマンに蹴りをくらわせた。

「やはり、知らないタッグでいかないとならないか。…マッスル・ブラザーズ戦まで取っておきたかったが、オメガマン、最終戦法だ。」

それを合図に、オメガマンは、ラーメンマンへと姿を変えた。

「気を付ける、万太郎。本物とどれほど違うかわからないが、本物

は技の数とその技のスピードにおいては、超人界最高とされたほどだ。」

「うん。わかってる。ボクの初めの先生だ。」

「フフツ…ラーメンマンだけと思うなよ。」

ラーメンマンが飛びかかってきたかと思うと、いきなり、オメガマンはその姿をロビンマスクへと変え、万太郎をタワーブリッジに捕らえた。

「グツ…」

「この二人には、昔から目を付けていてな。完璧超人に欲しかった存在だった。」

「万太郎！」

キッドにより、万太郎、何とかそれから逃れた。

「…超人ロケット！」

オメガマンが、キッドに向かって、発射された。

「キッド！」

万太郎によつて、それは止められた。

しかし、止められるのを予測してか、それは、ラーメンマンへと姿を変えていた。

カンフー殺法が万太郎を襲う。

「一度に二人の超人を相手にするのは、大変だろう。すぐに、楽にしてやる。レッグラリアート！」

「クロスボンバー！」

「…まずい！…万太郎！」

キッドは、クロスボンバーの中心へ飛び込み、万太郎を助けた。

「チツ…また逃げられたか。」

「オイ！そこまでだ。私よ…」

そこにいたのは、その時代のネプチューンマンであった。

「よせ！来るな！対消滅したいのか？」

「さすがに、経験の差でお前には勝てないだろうから、そんな方法

があるなら、そうさせてもらおう。」

「待って!…まだ、試合の途中だ。」

「そうだ。これから、万太郎と勝ってみせるんだ。」

「…そうか…ならば、せめて…ハア!マグネットパワー!…アポロ
ンウインドウを閉じてみせる!」

ネプチューンマンは、マグネットパワーで金属を吸い寄せながら
ある場所へと向かった

「させるか!」

「キング!」

「くらえ!クロスボンバー!」

「やめろ!烈火太陽脚!」

「モンゴルマン!」

「行け!あいつらには借りがあるからな。」

「グロロロロ…お前なんぞが敵うと思っっているのか?」

「さあな…」

「アポロンウインドウよ閉じろ。…さらばだ、マグネットパワー。」

「クツ…マグネットパワーが…」

「…今だ!マッスルG!」

「…キン肉ドライバー!」

「新世代マッスル・ドックキング!…!」

第24話 新世代マシンガンズ

「グッ…この世界で唯一完璧なものは正義超人の友情」か…私はこれを忘れていたらしい。あの戦いの日々を…この感覚を…それを思い出したいがためにここに来たのかもしれない。」

「ネプチューンマン……」

「今、ここには、多くの完璧超人が向かっている。本来なら、過去の私が死に、追い返すはずだが、それだと未来に完璧超人が残ってしまう。償いもこめて私がその多くを倒してこよう。」

「でも、そんな数の超人ではとても無事では……」

「…私は、元完璧超人首領ネプチューンマンだぞ。私はいつだってナンバー1だ。」

ネプチューンマンは、そう言い、宇宙へ飛び立った。

ネプチューンキング対モンゴルマン…

「グロロロロ…他愛もない。」

「その試合、私に譲ってもらえませんか？」

「お前は、確か、チェックメイトとかいう悪魔超人。」

「キング、あなたは、一度、倒させていただきます。」

「グロロロロ…モンゴルマンでも倒せなかった私を倒すというのか？」

「將軍のデータを利用させてもらいましょうか…地獄の断頭台！」

「グ…グロロロロ！」

チェックのその技にネプチューンキングは、地面に倒れた。

「やはり、將軍ほど上手いきませんか…倒すというのか？」

「ですか？私の名は、チェックメイトですよ…ボルトマン、それを運んでください。」

「一体何をするつもりだ？」

「黄金のマスクは、完璧なマスクとなつてしまったので使えない。ミートは、666の期間が無く、悪魔に浸すことができなかつたので使えない。使える候補は、フェニックスかこのキング。」

「何の話だ？」

「正確には、必要なはその戦闘頭脳。…悪魔將軍復活ですよ。」

その頃、マッスルブラザーズ対悪衆時間超人の試合では…

「超人絞殺刑！」

最強の伝説超人の本領発揮といったところか、試合は順調に進んでいた。

「Wキン肉バスター！！！」

キン肉スグルは、サンダーとライトニングを同時に抱え上げ、キン肉バスターを放った。

着地とともに轟音が鳴り響き、10カウントがマッスルブラザーズの勝利を告げた。

第25話 世界五大厄

「こうなれば、もう一度…」
敗れたサンダーとライトニングの前にその時代のネプチューンマ
ンが現れる。

「何をするつもりかは知らないが、それ以上の悪行を許しはしない。
…クロスボンバー！」
「グッ…」

サンダーとライトニングは、それにより倒れ込む。
しかし、サンダーの顔は笑っていた。
サンダーは、自身の角を折り、どこかへと消えていった。

「Wキン肉バスター!!」
サンダーは、過去へと跳んでいた。敗戦した悔しさからかあのマ
ッスルブラザーズ戦へと…
「キン肉スグル!お前を殺せば、すべては終わる。」
「させるか!なぜ、もう一体いるのかわからないが、オレが相手だ。
キン肉ドライバー!いくぞ、キン肉マン!」
「おう!変則マッスル・ドッキング!!」
テリーの機転により、マッスルブラザーズの決勝進出が決まった。

「こうなれば、もう一度…」
敗れた二人のサンダーとライトニングの前にその時代のネプチュ
ーンマンが現れる。
「何をするつもりかは知らないが、それ以上の悪行を許しはしない。
…クロスボンバー!」
「グッ…」

二人のサンダーとライトニングは、それにより倒れ込む。
そして、それにより、重なりあった二人のサンダーの体に異変が
起きる。

二人は、対消滅を起こし消えていった。

「…父上との対戦か。」

「ああ、グレートの本体は確認できてないが、たぶん、オレもパパ
との闘いになりそうだ。…油断するなよ。」

「わかってるよ。…ボクは、昔の父上を全然知らなかったけど、闘
いを観ただけで、その凄さがわかったよ。」

サイドストーリー第1話 完璧超人（前書き）

マシンガンズ対マシンガンズの前座的な話です。
（時系列的には、同じ頃ですが。）

サイドストーリー第1話 完璧超人

新世代マシンガンズとの闘いにより、改心した未来のネプチューンマンとオメガマンは、宇宙で、完璧超人と闘っていた。

また、完璧超人の中でも、ネプチューンマンの信念に賛同するものたちは、それとともに闘った。

そして、そのネプチューンマンたちの闘いを助けるために、超人師弟コンビ・Bーエボリューションズ・モーストデンジャラスコンビ・ノーリスペクトなども宇宙へと向かっていた。

「喧嘩スペシャル！」

「カタストロフ・ドロップ！」

「ナステイ・ギムレット！」

「釣鐘割り！」

「スピニング・ダブル・トウ・ホールド！」

「ビッグベン・エッジ！」

「ロビンスペシャル！」

「パロ・スペシャル！」

「合掌捻り！」

「ベルリンの赤い雨！」

「呪いのローラー！」

「ハリケーンミキサー！」

次々と完璧超人は倒されていった。

だが、完璧超人が一掃されたそのとき、ある者たちが、彼らの前に現れる。

それは、邪悪五大神と呼ばれる超人の神であった。

知識の神はロビンマスクに…

強力の神はバッファローマンに…

残虐の神はウォーズマンに…

飛翔の神はケビンマスクに…

技巧の神はスカーフェイスに…

それぞれとりつき、猛攻を開始した。

正義超人の中でも伝説超人と新世代超人の強豪の5人を相手にすることは、不可能に近く、戦況は一気に変わった。

「神が乗り出すのは、本来タブーとされているが、正義超人がこれで消えるならば…」

だんだん追い詰められていく彼らの中から、一人の男が進み出る。「待ってください、神々よ。そんな体にお一人ずつ入るよりも、私の体に全員入れば、完璧になります。」

「ほう…ネプチューンマンか…確かに…面白い。いいだろう。」

ネプチューンマンの体に吸い寄せられるかのように、邪悪五大神は、その中に入っていた。

「念のため、自爆よりの爆弾を持っていてよかった。…！何をします？ネプチューンマン！…無駄だ。出られやしない。体にマグネットパワーが残っていたのか、誰かがアロンウインドウを開いたのかわからないが、このマグネットパワーの力をみくびるな。…また、この時代で死ぬとはな。運命とは面白いものだ。」

自身の身を犠牲にした攻撃により、邪悪五大神は、消えていった。

サイドストーリー第2話 悪魔超人

「チエック！何をする？」

「これでよしと…ボルトマンのエネルギーは、ネプチューンキングのマグネットパワーへと変換し…その霊体は、4人の悪魔六騎士の霊体とともに、悪魔將軍の体を形成させる。これをキングと融合させ、あとは、サタンを待てば…」

「やめる！」

「モンゴルマン！…いや、ラーメンマンと呼ぶべきでしょうか？…まだ、やられたらないのですか？…將軍復活まで相手になりましょう。」

「フッフッフ…これまでの傷付きすぎたようですな。」

「おい！何をくだらないことをしている？」

「…！…アシユラマンまで！「くだらない」？あなたが二度も追ったものですよ？」

「くだらない…魔界は、これからサタンの支配から開放される。今さら、そんなサタンの器に用はない。」

「一度は、その血となったくせに…」

「黙れ！…悪魔超人や六騎士を解放させてもらうためにも、ボルトマンとやらが盗んだものは、返してもらおうぞ。」

「あなたにできますか？最強の悪魔超人も、今や、正義超人です。」

「…グランドスラムで相手をしましょう。」

「馬になったところで手の数が足りてないぞ…アシユラバスター！」

「別に、手の数を増やしたかったわけではありませんよ。あなたには、馬型との苦戦が似合うんです。」

「クツ…時間稼ぎというわけか…」

「ええ、もうすぐ、將軍は、復活します。將軍なんかのために、死

ぬつもりはありませんが。」

「お前、サタンや將軍を敬って再生を望んでいるわけではないのか？」

「あいにく、サタニストではないので。いくら、すごい力を持っているといっても、こつも手間がかかるのでは、いるのかわからないのかわかりませんよ。サタン自体は、超人に取り付くだけの超人の神と同じようなものですし、首領不在が続くからこそ、悪魔超人は衰退するんです。…ならば、私とその全ての力を奪ってしまおうと。」

「恐ろしいことは考えるな。悪魔將軍は、お前の手におえる相手ではない。」

「ほら、技に集中しないから、フックが甘くなっていますよ。…馬式 誉れ落とし！」

「ク…竜巻地獄！」

「ほう、衝撃を和らげましたか。もう少し戦ってみたいところですが、もうすぐ、復活なので…」

サイドストーリー第3話 正義超人

「ネプチューンキングよ…ネプチューンキングよ…」

「う…ここは？」

「我はサタン。ここは、お前の意識の中だ。」

「サタンだと。悪魔に魂を売る気は無い。」

「意地を張るな…神でさえ、私と契約したのだ。若さが欲しくないか？正義超人に恨みはないか？…ネプチューンマンを殺したくないか？」

「グロロロロ…」

「將軍よ、復活なされたようですね。」

「チェックメイトか、ボルトマンの記憶から、お前の働きは聞いている。私のために、よく動いてくれたな。」

「しかし、まだ、敵が…外にラーメンマンとアシユラマンが…」

「よし、準備運動代わりに潰してきてやる。」

その頃、時間超人ライトニングはその時代のネプチューンマンに追われていた…

「クツ…相手が悪い。」

「待て、お前は、ここで倒しておく。」

ライトニングは、とある洞窟へと逃げ込む。

「ウツ…ここは？」

「おや？ライトニングではありませんか？」

「グロロロロ…時間超人とかいうやつか。」

「同じ悪行超人だろ？助けてくれ！」

「同じ？この時代には、dMpすらないんですよ。その同盟すら裏

切りの多かつたのに、この時代で命乞いとは…未来を知っているあなたは邪魔なだけですよ。」

「待て！…時間超人は、種族だったな？ならば、コイツと悪魔超人の女性を交配していけば、悪魔超人の時間超人を作り出すことも可能はずだ。」

「やめておいた方がいいでしょう。悪魔超人には、すでに、ブラックホールやペンタゴンなどといった次元を超える者がいますから、それに何とかそのアポロンウインドウの力を与えれば、ライトニング無しでも産まれるでしょうし、これからの未来、時間超人無しでも、私がいれば、悪魔超人の天下にできます。」

「そうか…ならば…地獄のメリーゴーランド！」
ライトニングは、それにより殺された。

「そこまでだ。」
そこには、ネプチューンマン・モンゴルマン・アシユラマンがいた。

「事情は聞いたぞ。悪魔將軍、勝負だ。」

「ネプチューンマン・ラーメンマン・アシユラマンか…グロロロロ…完璧超人・残虐超人・悪魔超人のリーダーたちじゃないか…情けない…全員正義超人入りするとはな…あの5人や超人閻魔もなげくことだろう。」

「悪魔將軍、あなたの戦法はもうわかってる。」

「アシユラマン、果たしてそうかな？…マグネットパワー！」

「バカな！？アポロンウインドウは、確かに、閉じたはず。」

「ボルトマンの半永久的なパワーを利用したのだ。…さて、地獄を見せてやるぞ。」

「そんなもの…」

マグネットパワーは、ネプチューンマンの中へと吸収されていた。

「クツ…マグネットパワー無しでも…」

「いや、終わりだ。お前の軟体超人としてのエスケープは、このマグネットパワーで封じさせてもらう。…喧嘩ボンバー！」

「將軍よ、スカーフエイスを見て学んだ、私の技を見よ！…アルテイメット・アシュラバスター！！」

「正体がバレているなら、この技も許されるだろう。…キャメル・クラッチ！！」

「助けてくれ、チエック…」

「データは完全に取れました。これは、もう必要ありません。」

そう言つて、チエックは、悪魔將軍の目の前で、ジェネラル・ストーンを取り出し砕いて見せた。

「何をする？」

「…実にいいデータでした。…チエス・駒・チェンジ！サクリファイスキング！」

「わ、私に変身しただと！？裏切るのか？」

「…イリーガルムーブ・地獄のメリーゴーランド！！」

サイドストーリー 第3話 正義超人（後書き）

サイドストーリーも、もう1話残っているのですが、次話は、マシンガンズ戦です。

第26話 ザ・マシンガンズ

「サイド・キン肉バスター！」

「なんの、首のフックを抜いて…マッスル・ミレニウム！」

キン肉スグルは、21世紀の技が初見となるため、それを返せなかった。

「なんの…そんな技、屁のツツパリにもならんわ！」

だが、何度も立ち上がるスグルに万太郎の方が疲労していた。

「まずいな…あれでは、技を破られるのも時間の問題…」

「戦法を変えるのだ。お前は、ライメンマンを師としたことがあるのだろう！」

どこからか、声が聞こえた。

「誰だ？」

キッドが見回すが、その声の主は、どこにも、見当たらない。

時間は、少し遡る…

悪行超人たちとの闘いの最中、ある理由で、自らの命を絶つた未来のネプチューンマン…

しかし、この試合を観たいという心残りが、かつてのアタルのように、少量の灰に命を与えた。

「ネプチューンマン、その心意気、しかと見届けたぞ。キン肉マンたちには悪いが、この試合、新世代マシンガンズに加担するとしてよ。」

そう言ったのは、ネプチューンマンの灰を持つカメハメであった。

「ラーメンマン…キヤメルクラッチ！」

「グッ…」

「テキサス・クローバー・ホールド！」

「央クラッチ！」

その技の前にキン肉スグルはダウンした。

「キン肉マン！…スピニングトウホールド！」

グレート（テリー）の技がキッドに極まった。

マッスルブラザーズ（ザマシガンズ）の反撃が開始されるかと思われた。

そのとき、また、どこからか声が…

「お前は、まだ、デビュー当時のテリーマンよりも若い。無理にオリジナルホールドを作ろうとするな。技は、時間とともに成長していく。お前は忘れているだろうが、テリーの技の多くも、その父親や祖父からのものだ。使った期間から考えても、お前は、まだ、テリーほど

技を使いこなせてはいない。…ならば、やはり、テリーの知らない技で行くしかない。」

「パパの知らない技…そうか！スピニングダブルトウホールド！」
キッドは、スカーの技をグレートへかけた。

「グレート！」

キン肉スグルの補助で、難を逃れた彼らは、あの技を開始する。

「いくぞ。キン肉マン！…キン肉バスター！」

「おう、キン肉ドライバー！」

そして、また、あの声が…

「焦るな！このマッスルドッキングにすら、弱点はある。この世界に完璧な技などありはしない。だから、高めあうのだ。」

「…そう言えば、パパが言っていた。「強い筋肉を要するキン肉バスターは、テリー一族には、難しい」と。」

キッドは、一瞬の隙を付き、キン肉バスターを敗った。

「何？」

「パパの教えでは、「こういうとき大技で切り返せば、また、隙ができる。」と言っていた。…ハイボルテージ・ボム！」

「グツ…」

「これで一度、相手を怯ませて…テキサス・コンドルキック！そして…カーフ・ブランディング…！」

「テリーマン！？」

「父上、また、足のフックが甘くなってるよ。…ようし、ボクも、連続技で…万太郎ロケット！」

万太郎は、キン肉ドライバーを逃れると、一度リングへ降り、ロプから超人ロケットとなり発射した。

「グア…」

「マンタローストレッチ…！」

「何のこれきし…」

「やっぱり、父上はすごいや。これでも、意識を保っているなんて…でも…」

キン肉スグルは、火事場のクソ力を発動させたが、万太郎も、それを発動していた。

「何だと？」

「ケビンとの闘いでわかつたんだ。この力ばかりに頼ってはいけないって…マンタローハカイ落とし…！」

「グアアア…！」

試合は終わった。

二組のマシガンガンズが堅い握手をかわした後、新世代マシガンズは、トロフィーを抜いた。

そこに新旧の正義超人たちが現れ、未来のネプチューンマンの死が知らされる。

亡きくずれる正義超人たち…そのにカメハメは現れる。

カメハメは、試合中の声の正体がネプチューンマンであったことを語る。

「もしかしたら…父上、フェイスフラッシュだ。」

万太郎とスグルのフェイスフラッシュにより、蘇っていくネプチューンマン。

そして、そのフェイスフラッシュの影響が、トロフィーに付いていた邪悪な根は燃えていた。

サイドストーリー第4話 残虐超人

ボルトマンとライトニングの死体を抱えた未来のネプチューンマンとともに現代へ帰っていく新世代超人たち…

過去のミートの協力により、なんとか彼らは、現代へと帰りつく。

あのタッグトーナメントにより、伝説超人と同等の英雄とされる彼らは、温かく向かえいれられる。

しかし、誰も気付いていなかった未来に急激な異変が起きてしまっていることを…

彼らが出発し帰還したタッグトーナメント跡…

その近くにある日本一巨大な山…

そこに刺さる一本の巨大な腕…

「何故だ？何故、まだ、d M pのアジトが!？」

「何を言ってるんだ？あれは、残虐超人軍のアジトだろ？オレたちは、それと戦っている最中じゃないか！」

「何だつて!？」

「どうやら、歴史が変わってしまったらしいな。オレたちの記憶が変わってないのは、過去で数日間過ごしたから、その分の差があるのだろう…いや、だからと言って記憶が変わるまでに数日の猶予あるとは限らないが…おそらく、ウルマンなどの残虐超人の生き残りがやったのだろう。内部抗争もなく残っているというわけだ。だとすれば、新世代超人はともかく伝説超人の残虐超人の弱点を知るのは我々のみ。数日間で壊滅させるぞ。」

「フッフッフ…少し惜しいですね。」

天から妙な黒い影が現れる。

「何者だ？」

「…チエックメイトですよ。この組織は、私が人数の多く残る残虐超人に潜入し、この力の前に完璧超人と悪魔超人をひざまづかせ造らせたもの。では、あそこの頂上にてお待ちしています。」

正義超人たちは、人々の平和のために今日も戦う。

サイドストーリー第4話 残虐超人（後書き）

残すは、没ネタを含むエピソードだけなので、実質最終話です。

末文

今まで、読んでいただき、ありがとうございました。

小説を書くこと自体が初めてなので、いたらない面が多数あったか
と思います。

ここで、最後に没ネタを…

第9話 モーस्टデンジャラスコンビ の没ネタ

モーストデンジャラスコンビ対超人師弟コンビ…

しかし、その試合に乱入しようとする者たちがいた。

「わざわざ、新世代超人と伝説超人の両方を相手にすることはあり
ません。伝説を消せば、おそらくは、新世代超人は消えます。それ
がなかったとしても、動揺はあるはずです。」

「待て！誰だか知らないが、ダディの試合の邪魔はするな！」

「おや？シード権を持つB・レポリューションのお二人ですか。」

「お前は…ボルトマン！…それに…えっと、なんとかメイト！」

「いや、「なんとかメイト」って！一緒に、船に乗ったじゃないで
すか！？」

ケビンらしくないので没。

第25話を無かったことにして、時間超人サンダー&ライトニングは、そのまま機会を待つことに。

第26話での優勝決定の後、優勝タッグを襲い、トロフィーを奪おうとするも、もう一つのマシンガンズがそれを阻止。

しかし、時間移動の力で、サンダーだけは逃げ延び、トロフィーを狙うサンダー&ライトニング対マシンガンズの時代の混戦の中、そのトロフィーを奪う。

究極の力を手に入れたサンダーは、2組のマシンガンズと行う4対1の試合で力を示そうとするも、2組のマシンガンズのチームワーク・他の正義超人の友情パワーにより、敗北し、チエックに時間超人は、邪魔という理由で強制的に対消滅を行われ、消滅。

最後の敵なので、長くなってもよかったです、優勝後に長くなるのも、おかしいのでやめました。

末文（後書き）

やっと、終わりました。長くなって、すみません。

小説を書いたのが初めてなので、変な文章がおおかったでしょうが、おおめに見てください。

今まで、読んでいただき、ありがとうございました。

今回は、（時間に余裕があればですが、）真弓編でも書きたいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2406c/>

キン肉マン 時間超人編 タグトーナメント

2009年3月24日09時43分発行